

サンマ漁への震災の影響と今年の漁への期待

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中神, 正康, 巢山, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006364

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



東北水産研究レター No.25 (2012. 9)

サンマ漁への震災の影響と今年の漁への期待

秋の味覚サンマの季節がやってきました。今年も9月に入り水揚げが増加し、手頃な値段で味わえるようになりました。一方で、サンマの水揚げを期待する三陸の水揚港では、昨年の震災の影響をまだ引きずっています。

2011年3月11日の東日本大震災はサンマ漁業にも大打撃を与えました。サンマ漁業への影響は大きく3つありました。

1つめは三陸各地で船体の整備をしていたサンマ船の津波による被災です。火災などの二次災害により損傷の激しい船は廃船へ追いやられてしまいました。



写真1 震災で地盤沈下した気仙沼魚市場

2つめは被災した三陸の港（写真1）でのサンマの水揚げが大きく減少したことです。サンマの水揚量を北海道と本州で

比較すると、2010年までは本州の水揚げが北海道の水揚げを上回る年が多かったのですが、震災後の2011年は本州での水揚げの割合が35%にまで大きく落ち込みました（図1）。特に本州で1、2の水揚げを誇る宮城県の女川港、気仙沼港は、過去10年（2001～2010年）の平均のそれぞれ19%、24%にまで落ち込みました。その一方で岩手県の大船渡港は過去10年の平均の86%と落ち込みはわずかとなり、被災やその後の復旧には地域により大きな違いがみられました。

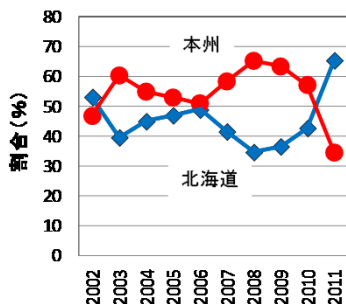


図1 2002～2011年の北海道と本州の漁港でのサンマ水揚げの割合

3つめは、福島第一原子力発電所周辺海域での操業ができなくなったことです。2010年までは、11月以降になると福島県から千葉県沖でサンマ漁場が形成されていました。それが、2011年には、かなり東沖でのサンマ操業を余儀なくされてしまいました（図2）。このことにより、遠くの沖合まで出漁できない小型のサンマ船は操業を早々に止めてしまいました。

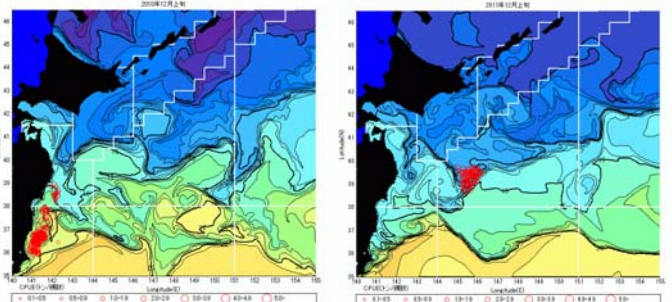


図2 2010年12月上旬（左）と2011年の12月上旬（右）のサンマの漁場 赤丸がサンマを漁獲した地点で丸の大きい方が多く獲れたことを示す。（漁業情報サービスセンター作成）

7月31日に発表された平成24年のサンマ長期漁海況予報では、9月になると漁況は上向くと予測されました。9月に入ると、その予測どおり北海道の港を中心としてサンマの水揚げ量は増加しました。また、女川、気仙沼、大船渡、宮古など三陸の各港では、少ないながらもコンスタントにサンマが水揚げされるようになりました。被災船は新船として生まれ変わり、今年はお出漁しています。三陸各港の冷蔵庫や加工施設の整備も急ピッチに進められており徐々にではありますが、秋の深まりとともに、三陸の港にも新鮮なサンマの水揚げが増えていくことでしょう。

（資源管理グループ 中神正康・巢山 哲）



この研究に取り組んでいる中神正康 主任研究員（国際会議が行われたウラジオストクにて撮影）

①サンマ漁への震災の影響と今年の漁への期待
コンテンツ ②震災後のアマモ場とそこに棲む稚魚たち～藻場の回復と今後の資源増殖～